

沖縄と済州島における伝統的集住空間構成の比較研究

朴 賛 弼

Comparative A Study about The Space Composition of Traditional Houses and Village of Okinawa and Jeju Island

PARK Chanpil

Okinawa and Jeju Island located at the southern most geographically and resemble it historically. I considered similarity and the difference of both islands based on the results of research. A common point of Okinawa and Jeju Island is that there are more rain and typhoons than the mainland.

Therefore both islands had various wisdom in a house to prevent those damage. For example, as a common factor of both islands, it is the stone wall around the site. These stone walls are similarities of the village landscape of both islands. However, It is different in the materials of the stone wall. A thing of Jeju Island is a basalt and is a coral stone in Okinawa. After all it is the difference in condition of the soil of both islands, and this is the local unique culture.

The common point in the placement plan of both islands accepts south periodic wind in summer. Jeju Island has a Korean stove and a dirt floor conveyed by the mainland for winter heating. It becomes in both islands in Okinawa that a central room does not have a dirt floor that totally different. As a result, I clarified characteristic of the village and the traditional house in both areas.

Key words

Okinawa, Jeju Island, traditional house, space composition, similarity, difference, stone wall

1. はじめに

本稿は、沖縄と濟州島における伝統的集落や住居の空間構成の在り方を、自然人文環境の視点から比較したものである。沖縄諸島と濟州島はそれぞれ日本と韓国の本土とは異なった文化を持つ。両島は、地理的にそれぞれ最南端に位置し、自然人文環境が類似している。たとえば、島における自然条件の厳しさは血縁と地縁の結合を緊密し、共同運命体として生活し続けてきた。このような暮らしの環境が島々の独特な集住文化を形成した。沖縄と濟州島のすまいを理解するためには、それぞれの地域の衣食住生活、冠婚葬祭の風習、信仰の背景などあらゆる生活の面から考えなければならない。さらに、気候と風土によってすまいは特徴を現している。その方法として隣接する国々のすまいと比較しながら考えると理解しやすい。両島は両国からみてもすまいの原点を探るためには非常に重要な地域である。沖縄と濟州島に関する研究は多方面から行われているが、両島のすまいに関する比較研究は見当たらない。

このように沖縄と濟州島のすまいの性格を比較しながら類似点と相違点を洗い出すことによってその特徴を明らかにすることが本研究の目的である。本論は2010年度に発表した「濟州島における伝統的集住空間構成に関する研究」¹⁾と2011年度に発表した「沖縄における集住空間構成に関する研究」²⁾を基に比較したものである。

2. 自然人文環境

2-1 気候

沖縄の気候は、海洋性亜熱帯に属し、四季の感じはうすい。そして、夏は長くて蒸し暑い。しかし、真夏の最高気温は33℃前後で、むしろ東京や大阪のほうがもっと暑い日もある。夏は日交差が小さく、那覇市と石垣島の年間平均気温は23.72℃であり、相対湿度は77.25%、5月から6月の梅雨の時期には約85%の多湿である。10月中旬からは北風により、湿度は約65%まで下がり、大変過ごしやすくなる(表1参照)。沖縄の気候で、もっとも特徴的なのが雨である。亜熱帯特有のスコールが突然襲ってくる。那覇市と石垣島の年間降水量の平均は2,130mm程度で多い方であるが、大きな川が少なく、すぐに海に流れだしてしまうため、夏場に晴天が続くとあっという間に水不足になってしまうので水が大切であった。沖縄は極めて台風が多く、

1) 朴賛弼「濟州島における伝統的集住空間構成に関する研究」『関西大学東西学術研究所紀要』第43輯、関西大学東西学術研究所、pp. 65~93、2010年4月

2) 朴賛弼「沖縄における伝統的集住空間構成に関する研究」『関西大学東西学術研究所紀要』第44輯、関西大学東西学術研究所、pp. 273~296、2011年4月

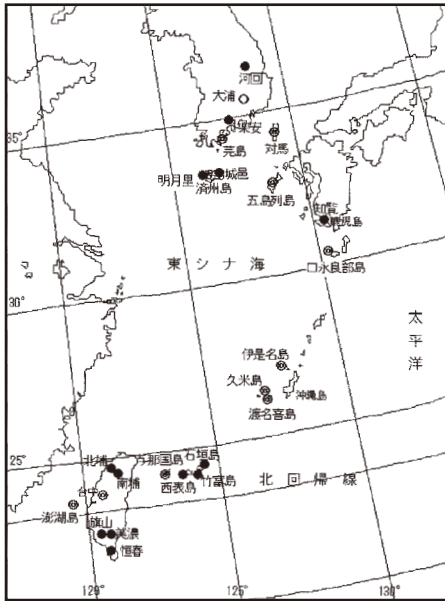


図1 沖縄と濟州島の位置図

表1 沖縄と濟州島の気候

気 候	平均気温 (℃)	相対湿度 (%)	平均風速 (m/s)	降水量 (mm)
那 覇	23.4	77	5.5	2,053
石 垣 島	24.04	77.5	7.1	2,207
平 均	23.72	77.25	6.3	2,130
済 州 市	15.8	69.6	4.7	1,498
西 帰 浦 市	16.6	68.7	3.8	1,923
平 均	16.2	69.15	4.25	1,711

那覇市と石垣島の平均で6.3m/sであり、風が強い地域である。

一方、濟州島の気候は海洋性気候であり、韓国の中では最も温暖で、韓国国内では“韓国のハワイ”とも呼ばれている。しかし、島の真中の大きな山（ハンラ山海抜1950m）の影響で天気の変化が多い。年間平均気温は北の済州市と南の西帰浦市の平均で16.2℃である。濟州島の平均気温は沖縄より約8℃低く、東京に似ている。夏の気温は沖縄と同じように蒸し暑く感じられる。冬は、北からの季節風が強く平均気温は5℃～6℃であるが、体感温度は実際の気温より低く感じ、沖縄の冬とは違うものがある。濟州島は冬の寒さをしのぐために、暖房設備として本土の影響をうけたオンドルに対して、沖縄にはそのような暖房設備はない。両地域の平均相対湿度は69.15%、6月から7月の梅雨の時期には約75%であり、10月からは4月までは約65%まで下がる。また、年間平均降水量は1,711mmであるが、濟州島も沖縄と同じように大きな川が少なく、雨が降っても浸透する乾川のため水が大切であった。

両島の気候の特徴は強風である。防風対策として石垣を築くことなどは類似し、このような自然環境に対する住居の要素が沖縄と濟州島の独特の景観や暮らしとなる。



写真1 沖縄クスク(城)



写真2 済州島ハンラ山

2-2 歴史

沖縄が日本史に初めて見られるのは西暦753年、遣唐使が台風にあい沖縄島に漂着したという記録からである。10世紀頃アヂ(按司)とよばれる首長が出現し、11世紀の末には島の各地に割拠していた。12世紀末(1187年)には舜天王が即位し、王国が成立する。1429年には沖縄全体を統一し、いわゆる琉球王国が出現する。琉球は薩摩の属領となり、表面的には独立国を装い、対中国貿易を続ける。そして、その利益はすべて薩摩に搾取され、その蓄積が明治維新の薩摩の原動力となったといわれている。こうして、明治5年(1872年)に琉球藩となり、1879年3月に沖縄県となる。

済州島は、「タンラ」、「ソプラ」などいろいろな名前で呼ばれる部族国家で形成されていた。この部族国家は巨大な王国や高度な文化国家には成り立っていなかった。3世紀には済州島人は「タンラ」(耽羅)民族に比定する説がある。その後、耽羅国が成立し、4世紀頃には百済に朝貢していた。新羅の朝鮮半島統一後は、主に新羅に朝貢するようになった。

高麗時代の1105年には耽羅州として直轄領になり組み込まれ、1214年から済州と呼ばれるようになるが、支配層は高い独立性を維持し続けた。元に対して抵抗した三別抄の残党は、済州島を最後の拠点として立てこもった。結局、済州島は元の直轄地になり、馬産地になる。李氏朝鮮時代には朝鮮八道の1つである全羅道に組み込まれ、在地勢力は次第に力を失った。朝鮮時代には江華島と並ぶ流刑地の一つでもあった。以上のように沖縄も済州島もどちらも本土からの圧力により属国を維持しながら歴史を繋いでいた。

2-3 共同体意識

両島とも川が少ないため、共同施設である井戸は貴重なものであった。両島とも地層・地質



写真3 沖縄竹富集落



写真4 濟州島城邑集落

の関係上、飲料水に適する井泉が少なく、生活上きわめて貴重なものであった。どの村でも古い井泉は聖地として扱われ清潔に保たれていた。両島の共同体意識は、本土よりももっと強い。経済的にも最小限であり、自給自足に必要な糧の生産は、畑作を中心に行なわれた。従って未分化のままの農耕など、社会的状況や厳しい環境条件から克服する為には当然地域社会の結束を強めて、共同体意識を高める運営方式による組織を作るようになった。これは、社会的行動を固く括るといふ文化的特性に表われている。

以上のように両島は、共同運命体は同じ性格を持ち外部からは閉鎖的であり、内部では開放的である。すなわち、本土にくらべると両島の特徴は、島であること（insularity）による孤立と限られた領土であることが言える。

2-4 信仰

沖縄人の神に対する考え方の中で、垂直神である「オボッカグラ」という神がある。これは聖地・神山に天下ると信じられている神である。垂直神に対しては水平神もある。これは渡海神であり、遙か海を渡ってくる神で、「ニライカナイ」という。また、血族的結束に基づく祖先崇拜があり、農作物をもたらす土地への崇拜もある。

このような様々な信仰感情を組織化するには風水思想³⁾はきわめて有効な手段であり、当時

3) 集落、住居における風水思想の位置づけ

過去の東アジア地域において、集落が形成され住居が建てられるためには風水の理念が関わっていたといわれている。すなわち、自然環境の地形を選定することが風水の根本的思想であって、集落を形成する場所として生理的、心理的に満足が得られる。住居の向き（坐向）と門との位置関係は陰陽五行から来る凶吉の関係によって決まってくる。風水は居住空間に対して凶を避け、吉を求める心理的に欲求を満足さ



写真5 御嶽（竹富島）



写真6 海神（沖縄島）



写真7 巫俗（済州島）

王府の中心は政策として位置づけられた。住居を構えるには、いろいろな条件があるが、信仰はその中で重要な役割を果たす。たとえば民家の配置、間取り、「ヒンプン」、「シーサー」（獅子）などは、住居と信仰との大切な関係である。また、沖縄しかない御嶽とは琉球地方に確立された独自の自然観に基づく信仰形態を表す顕著な事例である。

済州島の巫俗は現在まで続いて生活の中に奥深く残っている。地理的制限と悪条件の気候の環境の中で先代から自然的に発生したこの原始宗教は、生活の母体になって住居と密接な関係で共存する。巫俗信仰は、利益的な世界観を持っていて、人間世界の生と死の二元構造を区別せず、人間は出生から神の守護をもらいながら死んだら神になると考えた。済州島の巫俗信仰は神の位階にしたがって住居内にそれぞれの領域があり、住居空間の中で場所意識に影響を与えた。また、朝鮮時代には本土から伝わってきた風水思想は集落や住宅を構成する精神的要素として影響を与えた。

両島の共通点は土俗信仰思想と風水思想を融合させながら集落と住居の空間構成に大きな影響を与えたことである。しかし、その土俗信仰や風水思想でも沖縄と済州島ではそれぞれ違う独特な神を持ち、個性の集住空間構成を持つことになる。

2-5 風水思想からみた集落の空間構成

風水思想の基本となる集落周辺の地形と四神相応の関係、背山臨水の軸と Settlement line に

せることを目的として自然環境を最大限に利用した。

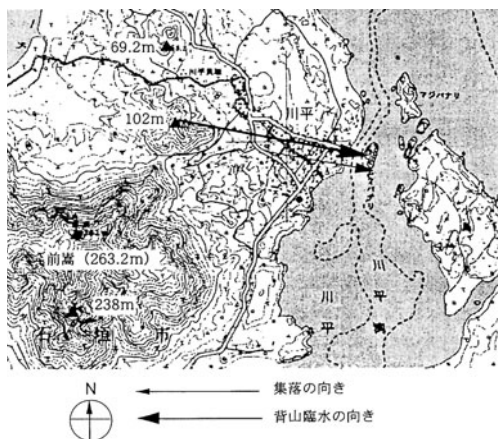


図2 石垣島川平集落の地形図



図3 石垣島川平集落の軸

表2 石垣島川平集落の母屋方位

方位	方位											合計					
区域	北	北北東	北東	東	南東	南	南南西	南西	西	北西	北北西	北西					
軒数			73								5					2	80
%			91.3								6.3					2.5	100

ついて⁴⁾ 沖縄の二つの集落と濟州島の一つの集落を比較分析した。石垣島の川平集落は西側にある山を背負い東の海を前面とする背山臨水の形態になっている。すなわち、背山臨水の軸は北北西から東南東の方向になっている（図2、3）。四神相応は主山の玄武、集落の東にある小さな島が案山になる。主山と繋がる背山臨水の形態になっている。四神相応は希薄であり、その方位性は妥当ではない。集落の Settlement line は表2から母屋の向きが主山と案山を結ぶ東南東の方向になり、背山臨水の軸と一致している。

4) 風水思想と軸

風水では人間が住む所を陽宅、死者が住むところを陰宅といい、両者において気が最も集まる中心的な所を穴、穴の前面で生気を受けられる平らな場所を明堂という。穴や明堂は陰を背にし、陽を抱えて、後に山を背負い、前面に水を持つのが基本である。このような場所を背山面水、背山前水または背山臨水と言ひ、吉地である。背山臨水の軸は集落の背後の山を主山とし、その主山から集落の前面に水があるところの方向とする。すなわち、主山と案山（集落の前面にある低い山）を結ぶ軸である。背山臨水の軸は気がもっとも流れるところであり、その軸に沿って穴と明堂が存在することになる。このような背山臨水の軸の線上に集落、住居が定着すると共に集落の向きが決められる。Settlement line は定着した集落における住居の向きが一番多い方位とする。

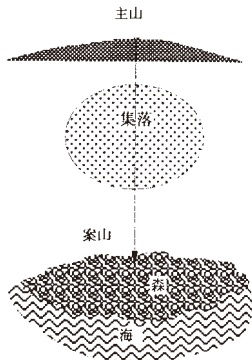


図4 竹富島の軸

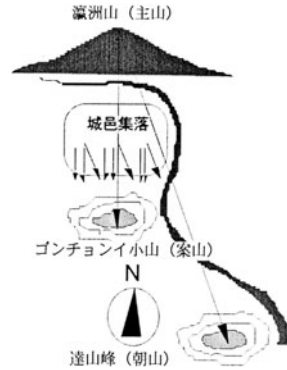


図5 城邑集落の軸

区域 \ 方位	↑	↖	↙	←	↗	↘	↓	合計	
軒数	5	2	1	0	89	0	1	2	100
%	5	2	1	0	89	0	1	2	100

表3 竹富島の母屋方位

区域 \ 方位	↑	↖	↙	←	↗	↘	↓	合計	
軒数	36	27	6	7	2	1	2	2	85
%	42.3	31.7	7.1	8.2	2.3	1.2	2.4	2.4	100

表4 城邑集落の母屋方位

竹富島は集落の北側を小高い森が囲み、背山臨水の形態になっている。しかし、小さい島であるため山がなく、ほとんど平地になっている。したがって、地形の高低の差はあまりなく、微妙な地勢の差を利用して集落をつくったと思われる。その平坦な地形でも四神思想をもって明堂に位置する。その方位性も妥当である。これらは沖縄の農村集落の配置については古くからクサテノミイ（腰当の森）の考え方があり、風水説に基づいているといわれている。図4から背山臨水の軸は南向きであるが、集落の Settlement line は表3からみると南南東になっている。すなわち、背山臨水の軸とほぼ南向きになっていることがわかる。

濟州島の城邑集落は普段、水が流れていない川を川と見做し、背山臨水の形態として捉えている。主山と案山を結ぶ軸及び集落と朝山を結ぶ軸が集落の空間を構成する二つの軸になる（図5）。その理由として表4から民家の母屋の向きは案山向きが42.3%、朝山向きが31.7%からである。

二つの中心軸により、集落における住居の settlement line も二つになる。このように風水思想の背山臨水の軸、四神相応は城邑集落の空間構成に重要な要素であったと考えられる。この風水思想による家の向きは風水用語で坐向というが、夏の季節風と関係がある。この季節風に対して坐向は夏の季節風の方位角の範囲になっていることがわかった。これはやはり冬の

冷たい風を防ぎ、夏の涼しい風を受け入れることである。

風水思想からみた沖繩と濟州島の相違点は四神相応の存在と方位が濟州島ははっきりしている一方、沖繩は希薄である。その理由として沖繩は小さい島であるため限られた集落の敷地と山勢が劣るからである。しかし座向は夏の季節の方位角の範囲になっていることは類似している。

3. 伝統民家の外部空間構成

3-1 配置

沖繩の伝統民家は宅地の周囲に石垣で塀をつくる。その塀を沿って福木が植えている。建物は基本的に別棟になっているが、上流階級の家屋では曲がり屋も存在する。建物の配置は「ヒンプン」という門と母屋が軸線上にあり、「ヒンプン」から入って左側にかけて畜舎・納屋があり、母屋の裏の左側の隅に石造りの「フル」と称する豚飼育所を兼ねた便所が配置されている。井戸⁵⁾は、畜舎と中庭の間に設けられ、あたい畑、すなわち菜園は母屋の背後にあり、母屋の右側には花壇などがある。離れ座敷の「あさぎ」⁶⁾はどこでもあるものではなく、規模が大きい屋敷で見られる。この場合、門の右側に配置し、前の家ともいう。

濟州島は「マダン」(庭)を中心とした求心的配置と別棟配置である。外部空間は「オルレ」、「オルレモク」、「マダン」、「アンティ」で構成されている。「オルレ」(進入路)は住宅内に入出入するカーブの進入路で、プライバシーの確保、掲示的、空間の秩序の意味を持つ。オルレは内と外に区分されていて、内の空間は「オルレモク」といわれ、樹木が植えている。濟州島の伝統民家は沖繩と同じように周囲に石垣で塀をつくる。建物の配置は「チョンナン」という門と母屋が沖繩と違い、同じ軸線上になってない。「チョンナン」から入って菜園があり、母屋の右側の隅には石造りの「トンシ」と称する豚飼育所を兼ねた便所が配置されている。

3-2 領域、境界、門

1. 石垣と樹木

沖繩の石垣は屋敷を強風から守るために発達したものであり、軒までの高さで、石材はサン

5) 井戸は「カー」と呼び、屋敷ごとにあるのが普通である。地形や地域によっては集落の数ヶ所に共同井戸を利用する。井戸の囲いは石積みであり、流し場は石敷きである。農家あるいは田舎の屋敷には、母屋の後方に「あたい」という菜園は自家用の野菜を自給している。

6) あさぎは一番座の前方横にたてられた離れ屋敷で、前の家ともいう。通常は二室からできているが一室の場合もある。一般的には、息子が嫁をもらった時、あるいは老人の隠居部屋または来客の宿泊部屋などに用いられた。神を祀ってある場合には「神あさぎ」と呼ばれている。



写真8 沖縄の石垣



写真9 濟州島の石垣とオルレ

ゴ、石灰岩である。手頃な大きさの石を内外ともに小叩き仕上げ、各々の石は互いに抱き合うように具合よく組積みしたものである（写真8）。その石垣周辺には樹木で囲う。その樹木は福木であるが、オトギソウ科の高木で、成木の高さは10～15mとなり、常緑樹特有の豊かな緑の葉を密につけてさわやかな気分を与える。福木は沖縄の人々の生活と最も深い繋りを持つ。石垣と樹木は強風から家屋を守るために絶対必要であり、火事が起こった場合でも隣の家に移ることを防ぐ。また、太陽の光がきつい夏場には日陰になって子供の遊び場にもなる機能ももっている。

濟州島は火山島であって、至る所に火山岩の塊が多く散乱している。濟州島の集落を訪れると沖縄と似たような雰囲気を感じさせる。それは家を囲んでいる石垣である。石垣の高さは一定していないが、だいたい地面から軒端までの高さである。石の積み方は、複列にして高く積む場合もある。石垣の高さ、積み方などは科学的というより長い間の経験から現在のようになったものであり、石材は玄武岩である。石垣の機能は敷地内の角石の処理、防風、視線の遮断、牛馬の侵入防止、境界の意味などがある。濟州島も石垣と共に樹木を植え防風の役割をする（写真9）。樹木は椿とみかんが多いが、柿も植えて食用と服を染めるときに使われる。以上のように、両島の石垣と樹木の構成は非常に似ているが、その石材と樹木の種類は違う。

2. ヒンブンとチョンナン

沖縄の門は按司の屋敷に限られていた。門は木造屋根付きの四脚門で、両開きの唐戸が付いている。一般農家では開いたままで、門扉はなかった。そして扉を設けないため外部が内部から見通せるので、門の内部に目隠し塀、即ち「ヒンブン」を設けている。



写真10 ヒンブン（竹富島）



写真11 鹿児島知覧、武家屋敷のヒンブン

門を入ると正面に目隠し塀がある。これがいわゆる「ヒンブン」である（写真10）。この「ヒンブン」は表から直接、建物の内部が見えないように造られたもので、屋敷内部との仕切である。中国には塀風門があり原形は中国から来たものであるが、「ヒンブン」のその形式は完全に沖縄化されて、色々なデザインが見られる。また「ヒンブン」を右に回れば一番座側へ向かうことになり、お客さん専用の出入り口である。左へ回れば台所側へ通ずるのが普通であって、家の家族専用の通路である。材料では石垣、瓦石垣、あるいは生垣（竹垣）、サンゴ石、または板塀などがある。「ヒンブン」は色々な機能をもっている。基本的にはプライバシーの為の目隠しであるが、その他に防風効果、アプローチの空間演出、視覚的な象徴性、精神的な役割、サイン性を持つ。また、悪鬼直進を防ぐための魔除けの思想ももっている。

日本の場合、沖縄だけではなく、本土の鹿児島県の知覧の武家屋敷でも見られる（写真11）。沖縄と違うのは母屋と一直線上に置かれてないことである。これは韓国の慶州でみた「ヒンブン」と似ている。韓国では「ヒンブン」は存在してないと言われているが、筆者の調査により慶州で「ヒンブン」がある伝統家屋を発見した。沖縄の機能性と類似している。聞き取り調査では「チュミョンビョク」と言われて、昔から使われたという（写真12）。「チュミョンビョク」というのは遮る壁という意味を持つ。この「チュミョンビョク」は、右からは家族、左からはお客さん専用である。また、右側には小さい門があるが、母屋に入るお嫁さんとお嫁さんの家族専用の通路である。

済州島の場合、「チョンナン」は済州島しかない開放的な門である（写真13）。その「チョンナン」は牛と馬の出入防止と家の不在を知らせる機能を持っている。

出入口には「チョンナン」を掛ける為に石で作られたものがあるが、これを「チョンチュン



写真12 チェミョンビョク（慶州のヒンプン）



写真13 濟州島のチョンナン

ク」といい、玄武岩で作られている。石で作られたものを「チョンチュソク」、木で作られたものを「チョンチュモク」という。この「チョンチュソク」の両方に三本の木「チョンナン」を横に掛けることで、家の中の人の不在を告げる役割をする。「チョンナン」は濟州島の泥棒・乞食・門がない三無の美風良俗を意味する。両島における門の類似点は、屋根がない簡単な構造物になっている。また、相違点は沖繩が閉鎖的であり、濟州島は開放的である。

3. 石敢當、シーサーとハルバン

石敢當は魔除けの一つであるが、沖繩では未だに根強く続いており、当地ではT字路や三叉路が多いことから、現在でも沖繩の各地で様々の石敢當を見ることができる（写真14）。これは、町の中に徘徊する魔物は直進する性質を持つため、T字路や三叉路などの突き当たりにつつかると向かいの家に入ってきてしまうと信じられている。そのため、T字路や三叉路などの突き当たりに石敢當を設け、魔物の侵入を防ぐ。魔物は石敢當に当たると碎け散るとされる。この石敢當は「ヒンプン」と同じように鹿児島県の知覧でも見られた（写真15）。

沖繩の「シーサー」は、いつごろからという確かな伝承はないが、古くから魔除けとして左右一対の石獅子が捉えられている（写真16）。民間としては、17世紀後半に火事がしばしば続いたので、風水師の指導に従って、獅子を設ければその災を防ぐことができるというのでその通りにしたらその後は火事が絶えたという説があって、明治以後に瓦屋根に設けられたと推定される。魔除けを役目とする「シーサー」は、屋根の傾斜面に置く場合が多いが、現代風は家の入口のところに置く場合も増えている。

濟州島の「ハルバン」は多孔質玄武岩で作られた造形物であり、そのおおらかな彫り方は素朴で、独特の風合がある。機能面では村の入口に立てられ、これからは村に入るという村の境



写真14 石敢當 (沖縄島北部)



写真15 石敢當 (鹿児島知覧)



写真16 シーサー



写真17 ハルバン (城邑集落西門入口)

界の知らせ、または村の平和を守る守護神にもなる (写真17)。また、呪術宗教的機能などを持っている。「ハルバン」の姿は帽子をかぶり耳が大きい人物像のことからモアイと似ている。その機能や模様が似ていることは遠い国から同じ発想を持っていたことは不思議である。

両島における魔除けの存在は似ているが、相違点は沖縄の場合、各家ごとに魔除けを置くことと濟州島は集落の入口に置くことである。なお、「シーサー」は屋根に置く一方、「ハルバン」は地面に置くという場所の違いもある。

3-3 外部空間要素

1. 庭、菜園

沖縄の前庭の部分は、「ナー」と呼び母屋の前の広場である。農家では作業場であり、今日という庭園ではない。普段は衣類や穀物類などの干し場であり、行事も行われる。母屋から前庭の眺めは、「ヒンプン」の存在で、外と内との閉鎖された静けさを感じる (写真18)。庭園は士



写真18 沖縄の庭



写真19 濟州島のマダン（庭）



写真20 アンティ（濟州島）



写真21 濟州島のウヨン（菜園）

族屋敷の一番座の近くに築造された山水をいうが、農家では造られなかった。農家あるいは田舎の屋敷には、母屋の後方に「あたい」という菜園をつくり、自家用の野菜を自給している。

濟州島の「マダン」(庭)は多目的機能をもっているのが特徴である(写真19)。この「マダン」は建築物と共存しながら相互有機的関係があり、その機能は通路としての役割、屋外生産及び作業、日照、通風、採光、情緒、婚礼・葬式の儀式が行なわれる空間である。「アンティ」(後庭)は外部には通らないようになっている空間で、他人には公開されない閉鎖的である(写真20)。ここを出入りしようとしたら必ず「サンバン」(板の間)の後門、あるいは「ジョンジ」(台所)の後門を利用しなければならない。「アンティ」は日の当たりが悪いが、夏には涼しい風がある空間である。また、外部との視線が遮断され、家族らのプライバシー空間でもある。風水思想からは住宅の陰の空間と言われる。

「ウヨン」(菜園)は民家の両側あるいは、前後に低い段に区画され、野菜以外にも穀類を栽



写真22 フール（沖縄島民俗村）



写真23 フールの跡（石垣島）



写真24 灰陶豚圈・灰陶豚（東京国立博物館）



写真25 トンシ（濟州島）

培する空間である（写真21）。「ウヨン畑」は規模が大きく、耕作地として取り扱われている場合もある。この「ウヨン」は一つの場所に集中させるより家の周辺の空き地に分散した方が効果的である。また、隣家との間に比較的広い空間を保つことが出来るので、火災防止の役割をする。したがって、家の内部空間と外部空間のゆとりを成り立たせる。「ウヨン」は自家耕作用であり、共同体的な意味はない。両島の庭は類似しているが、菜園は沖縄の場合、敷地内にあることに対して、濟州島は敷地内と外でもあるのが大きな違いである。

2. 便所・豚舎

沖縄では中国から伝わった便所と豚舎を一緒にした「フール」という施設があった（写真22、23）。中国では2階建が主で、人間の排泄は上階で行ない、下階は豚を飼育する。写真24は東京国立博物館にある豚小屋の模型である。中国の後漢時代1～3世紀の焼物であるが、当時の

豚屋をよく現している。小屋の床には長方形の孔が開いており、その下の壁にも半円形の孔がある。これは便所小屋と一体化した豚の囲いであり、人間の食べた物で糞を飼育できた。囲いの中では横たわった母豚の乳を4匹の子豚が飲んでいる。多産の豚は子宝や財産の象徴でもあった。

沖縄では石造りで1.5坪～2坪を1区画にしたものが、二連または三連に造られている。この中を豚の飼育小屋として兼用しているので、施設の中では最も特異的な存在であった。「フル」には12～15cm×50cmほどの穴（東司）をあけ、その中に用便をするように造られている。「フル」の位置は屋敷の北西の隅と定められているが、その方位に祀る所がある場合のみ北東の隅に設けられる。その場合、炊事屋の位置や母屋の間取りなどはすべてが逆になる。「フル」の習慣は、いつごろから沖縄にできたかは知られてないが、明治時代からは県令で禁止した。しかし、近年まで農村ではもとのままの設備が残っている。

韓国では唯一済州島だけ沖縄のような「フル」が存在していたがセマウル運動⁷⁾によってその姿は消えた。済州島の便所を「トンシ」とよび、台所と離れた「ウヨン」の空間に配置され、豚舎の一部に付随して設けられるのが一般的な形態である。「トンシ」の足をのせる石盤の高さは58cmぐらいで、この下で豚が人糞を処理する。用便中の人が見えないように石壁を築き、その上に簡単な屋根を掛けて雨を防いでいる。「トンシ」は現在、便所として使われず、ただ豚の飼育として使われている。先述したように沖縄では豚便所を「フル」といい、用便する穴を「トウシ」という。呼び方が沖縄と済州島と似ていることは地理的からみて、済州島の「トンシ」は沖縄から伝来したと考えられる。

3. 倉庫

沖縄の場合、高倉のある農家は中流以上である。高倉は高床式の倉庫であり、収納物は一般に穀物を主とし、そのほかあらゆるものに及んでいる。床は地上1.7m～2mほどの高床で厚板を用い、壁は上部が約45度傾斜している。高倉の出入り口は両開きの扉であったが、片引き戸もある。写真26からは一階は農機具や道具などを置き、二階は穀物など食べ物を保存するところで傾斜を利用しネズミ返しが工夫されている。階段はなく、使うときだけはしごで上る。写真27はインドネシアの高倉であるが、沖縄と似ている。一方、済州島では写真28の「ホッカ」⁷⁾という倉がある。済州島の場合、高倉ではなく、石で積んだ一軒家である。沖縄とインド

7) 1960年代前半から始まった韓国における経済復興運動。貧困から脱出しようとする政策。古いものを捨て新しいものを取り入れるきっかけとする。この時期、農村は道路や電気が拡充される。また、農家の屋根の材料が草葺からスレートやタン葺きに変わる転換期でもある。



写真26 沖縄の高倉



写真27 インドネシアの高倉



写真28 濟州島のホッカシ (倉)



写真29 濟州島のコパン (左側)

ネシアのように木造の柱で建てられているのではなく、柱がない玄武岩の組積造の壁構造になっている。

また、室内の「コパン」(庫房)は主に穀物、豆類、アブラナなどを入れた壺をしまっておく部屋である。床は地面より高く、オンドルの設備はない。壁は石壁の内部に土を塗った程度で、採光用、換気用の窓が1~2カ所ある。広さはだいたい6尺×10尺である。「ククドゥル」(大オンドル房)と「コパン」の基本的な計画は、「コパン」は「サンバン」(床房)を間に「ジョンジ」(厨房)と離れて「ククドゥル」と接している。これは平面計画上、分割方式によって部屋割りを合理的にしたことである。また、小農の生活環境における食料の重要性を裏付ける空間である。穀物貯蔵用の納戸や物置を別棟にせず、母屋の中で設けるのは、間取りが未分化の状態にある初期民家の一部の構造を示す。以上のように沖縄の高倉は南系統の倉であり、穀物も含めて同じ建物に置く。しかし、濟州島の場合は穀物は室内に置き、他のものは別棟の倉に置く。



写真30 雨端と縁側 (西表島)



写真31 ムットウンとテッマル (濟州島)

4. 伝統民家の内部空間構成

4-1 緩衝空間と室内空間構成

沖縄の室内と室外との緩衝空間として雨端がある。これは、一番座の側面、一番座から三番座の前面に設けることによって室内と庭を結ぶ緩衝空間をつくる。それは構造的に横力抵抗の補強、耐久性からは母屋の柱脚や外壁、建具の保護など機能を持っている。また、低い軒は強風を弱くし、強い日射を遮り、室内に涼しい日陰をつくり出す。

内部空間構成は前室と後室に分けたうえ、さらに三つに縦分割をとっている。すなわち、母屋の南側が座敷で、一番座、二番座、三番座という。北側には一番裏座、二番裏座、三番裏座などが並んでいる。

濟州島の緩衝空間として「ムットウン」と「テッマル」(縁側)がある。「ムットウン」は室内に直接雨が吹き込まないように屋根の延長として軒先を持ち上げることで出来た緩衝空間である。また、軒が長く伸びているので、日よけの役目も果たしている。「テッマル」(縁側)は、近所の人々が家の主人と短い話をするとき、靴を脱がないでそのまま腰掛けて話す所であり、子供たちが絵を書いたりする遊び所でもある。「テッマル」は室内と庭との間を緩衝空間として「サンバン」の機能の質を高めており、雨、風、日光が直接当たるのを防ぎ、一時的な物置の空間として有効に使われる。「テッマル」は外部空間と内部空間の中間性格を持つ。「ナンガン」とも言われる。濟州島は「サンバン」という板の間を家の中央に置き、両側に「クドゥル」というオンドル部屋を置く。「サンバン」は夏の空間として使われる一方、クドゥルは暖房設備がある冬の空間として使われる。濟州島の場合、本土より寒くないことからオンドルが未発達している。



写真32 沖縄の間取り



写真33 濟州島の間取り

4-2 間取りの機能

沖縄の間取りで、一番座は客間として使われている。「ヒンプン」から右に曲がってすぐ入る位置にある。二番座敷は中央に位置する仏間で、仏壇を設ける。御霊前の間とも呼び、正面奥の壁に幅1間（1.8m）の大仏壇を設けてある。その中に先祖の位牌を安置する。仏壇を立派に飾ることは祖先崇拜の表れである。用途的には親類、心安い人々（主に男子）を応接する客間である。親類にも使われて家族が多い場合は、主人夫婦の寝室を兼ねることもある。三番座敷は居間で、中流以上の住居では女性や若者の客間としても用いられ、茶の間および食事部屋に使われる。各座敷の裏側には裏座という小さい部屋がある。これは納戸、寝室あるいは産室などに使われる部屋である。裏座の使われ方は、集落や島によって多少異なる。一番裏座は長男夫婦または子供（男子）たちの居室、及び寝室にあてられ、中流以上の住宅では床が設けられることもある。二番裏座は主人夫婦の寝室または子供（女子）の居室、及び寝室である。三番裏座は老人の部屋にあてられることが多い。ここにはいろいろが設けられる場合もあり、産婦の寝室にもなる。

濟州島の「サンバン」(床房、居間)は本土では「マル」といい、家族の集会、休憩、夏季の就寝、接客、食事、祖先の祭祀などさまざまな機能をもっている。「サンバン」は主人の権威を表出する場所にもなり、家の神として家内の平安と富を担当する家の代表神を挙げるのもっとも重要な所である。「サンバン」の前後面は外部空間と直接、接しているので夏には通風がよく涼しい。

「クドゥル」は2つ以上あるときは「コバン」(庫房)に接する部屋を「クンクドゥル（大オンドル房）、他の部屋を「チャグングドゥル」(小オンドル房)と呼ぶ。「クンクドゥル」は夫婦



写真34 台所（沖縄）



写真35 ジョンジ（済州島の台所）

の使用、来客の寝室、幼児の寝室、祭室、産室、忌室などにも使用される。「チャグクドゥル」は子供たちの部屋である。床から天井までの高さは2m前後で比較的低い。

「チェッパン」は4間型の間取りに置いて、「サンバシ」と厨房の間に置かれる板間であり、食事や食事の準備、炊事の準備など家事労働空間と安息の緩衝空間である。「ジョンジ」と「チェッパン」そして、「サンバン」が連続することによって、寝食分離が可能になる。これは、現代生活の基本の間取りである。

4-3 台所

沖縄では「トウラ」といい、母屋と炊事屋は、別棟になっている二棟造りが特徴である。炊事を別棟とすることは温暖な地方に多く、母屋内で炊事をするとうちに熱気がたちこめ、そのうえ煙がまくことを嫌うためともいわれている。また、建築技術の未発達や経済的な理由で、規模の大きい建築をなし得ず、小規模な建物を屋敷内に分棟させて建てることも考えられる。それにしても炊事場を尊重し、宗教的な習慣によって独立させたと思われる。炊事場にはカマド神という火の神があって、家の養育の神、生命を与え存続させる神であり、神聖な場所として考えていたので別棟にした。また、自然環境からみて沖縄は台風が多い地域のため、曲がり屋や大規模の民家は不利であるため、別棟が当然有利である。現地調査では八重山諸島の二棟造りの民家は、母屋の中で炊事が出来るように3番座、あるいは3番裏座が台所になり、もとの炊事棟には倉庫として利用されているのが多かった。

済州島は台所を「ジョンジ」と呼ぶ。その機能は炊事、作業、乾燥、貯蔵など家事労働をするための空間であり、女性の主な空間である。ジョンジの壁は石で築き、土を塗って防火壁に



写真36 水入れ壺（竹富島）



写真37 水入れ壺を置くムルパン（濟州島）

なっている。もともと厨房は母屋にあったが、厨房の機能が炊事一本にしばらくされるようになると、広い厨房の空間に小オンドル房ができ、さらにオンドル房が増設されて、小オンドル房は2部屋となり、おのずから厨房は副屋や脇屋に移されることもある。厨房入口の横に高さ60～70cm程度の平石が積んであるが、「ムルパン」（水板）といい、ここは水運びの壺を置く台である。沖縄と濟州島の共通点は曲がり屋がない。その理由として風が強いから曲がり屋は不利であるからである。本来の台所は沖縄の場合、別棟にするが、濟州島は母屋にあることが両島の違いである。

5. 民家の立面

5-1 屋根

沖縄の伝統民家の屋根は茅が主であったが、地方によっては茅と笹、茅と竹、サトウキビ穀なども使用されていた。赤瓦屋根が普及したのは明治時代以後のことである。雌瓦の上に、円筒を縦に割った形の雄瓦を被せ、雌瓦と雄瓦の継ぎ目を、漆喰で丹念に固めたものである。沖縄の漆喰は海岸から捨ててきたサンゴ石灰岩の塩分を除いて焼き、小さく切った藁と砂をまぜてつくる。最初のうち黄色味をおびている漆も、しばらくして乾燥すると真白になり、普通20～30年の耐久性があるといわれている。瓦は素焼きのまま本土と違って琉球瓦の独特の赤色になる。琉球瓦の赤と漆喰の白のコントラストが実に美しい。この屋根は、台風時の強風、風水の逆流、雨漏りを防ぐだけでなく、暑さにも強い。細かく編んだ竹の上の全面に隙間なく土を敷きつめ、その上に瓦をのせるので、断熱効果も持っている。屋根にのっている魔除けの獅子の表情や形はさまざまで素朴であり、ユーモラスに富み、楽しさと親しみが感じられる。



写真38 沖縄の瓦葺屋根



写真39 濟州島の茅葺屋根

沖縄は戦後、復興が始められ、RC造住宅がどんどん建てられて屋根は赤瓦の民家とは全く異質の物になった。このRC造は陸屋根が多く、夏には日射量をそのまま受けるので蓄熱されたコンクリートからの放熱で室内の温熱環境が劣悪になっているのが現実である。さらに、那覇のような都市ではヒートアイランド現象も招く。

韓国の場合、本土の陸地での農家や庶民の伝統的屋根は稲藁葺きであったが、濟州島の場合は茅葺きであった。茅をしきひろげ、それが風に飛ばされないように茅縄を網状に掛け、括り付けている。茅葺き屋根の形態は、韓国本土でみられる寄棟型の小屋組に茅を厚くかぶせているため、隅棟の線がみえず、長く丸みをおびた半卵型の低いドーム状になっている。屋根の勾配を緩くし、隅棟の角を際立たないように丸くしたのは強風に対する抵抗を最小限にするための耐風的な形態であろうと思われる。縄の太さは濟州島の東西で異なっており、東部では直径3cm内外であるのに対して、西部では直径4cm程度のものを用い、東部よりも重たげな印象を与えている。セマウル運動から1970年代には屋根の材料として用いられたものはスレートである。これは屋根改良事業の一環として普及していた。スレートの長所としては、葺き替える必要がないことや屋根から雨水を受けて利用するのに都合がよいこと、茅葺きよりも堅固であること、などがあげられる。一方、短所としては、茅よりも直射日光に対する断熱効果が劣り、夏季に屋内が暑くなり、冬季にはやや冷え込むことから温熱環境には劣悪である。また、濟州島全体の自然景観に調和せず、異質な感じを与えること、などがあげられる。

この時代にはトタンの屋根もあるが、きわめて少ない。それ以後、濟州島の人々は少しずつ豊かになって、瓦葺きの民家が多くなってきた。瓦葺きの民家の屋根は風に飛ばされたり、瓦のすきまに雨が入り込んだりしないように、瓦と瓦を石灰でしっかりと接着させているため、

本土の瓦葺き屋根に比べて白い色が目につく。最近では濟州市と西帰浦の住宅地にR.C造の建物が数多く建てられている。これもやはり強風地域の屋根の形態としては理想的なものであるが、濟州島の風土的な民家とはいいいにくい。

このような風景と屋根の変化過程は非常に似ている。茅葺から瓦、RCまでの変化でも強風対策は同じ考え方であろう。

5-2 壁

沖縄では板壁に改められているものが多いが、茅壁、クバの葉、竹壁、網代壁などもある。壁のかわりに板戸である雨戸がある。ただし、炊事家の場合、防災のためカマドを築いている側壁面だけ石壁としていることもある。雨戸の特徴はもちろん雨が母屋へ入り込むのを防ぎ、蒸し暑い夏場には全部開ければ風通しがよく母屋の全体が日陰の空間になる。雨戸を開ける程度によって、通風が変わってくる。また、風が吹いてくると、方位によって雨戸を開ければ、室内はいつも通風がよくなるはずである。沖縄民家の壁による通風計画は自由自在の通風が出来るようになっている。

濟州島の場合、骨組みは木造構造で壁は玄武岩で築いた非耐力壁である。つまり、架構式と組積式の混合形である「木骨石」になっている。壁で使われた石の厚さは約35～50cm程度で地面から上部までの高さは1.9～2.0mである。上部は壁の厚さを9～10cmほど積み替えて勾配になり建物の安定感を高める要素になる。石壁をひさしまで積まないようにして約30cmの空間を置き、影を作っている。これは屋根が軽快に浮上しているように見える。また石壁はもっと強く堪えるように感じられる。

5-3 材料

沖縄の建築材料として基礎及び塀の石垣に使う石材はサンゴ石とよばれ、珊瑚礁によって出来た石灰石が主材料である。軟らかく加工しやすい反面、他の石に比べると耐久性に欠け、風雨による風化が早い。雨端柱の基礎にはとりわけ「ツブル石」と呼ばれている。水はけがよく、柱の腐食防止によいとされる。木材として、槇（チャーギ）は沖縄における重要な建築用材であり、耐久性、強度的に優れた性質を持っている。沖縄の名物である福木は材質的にはねばりがあって、柱、梁材として使われるが、ひび割れが激しくねじれ易い性質がある。一般的には小屋組の束、梁など目立たない部分に使用される。

濟州島の建築材料は、本土では木材として松が一般的に使われている反面、濟州島では白樫、栗の木、桜などが使われている。石材の場合、本土では花崗岩であるのに対し濟州島では玄武岩

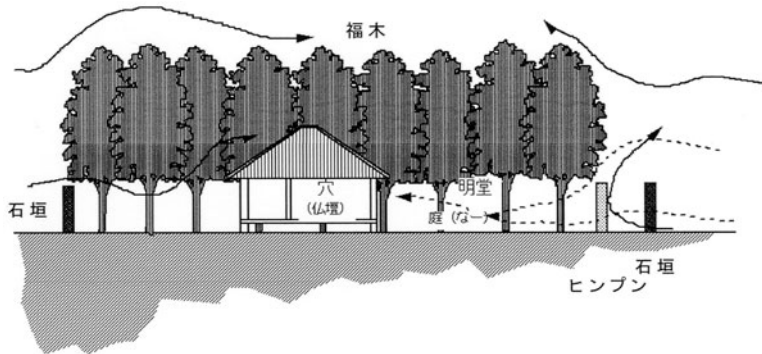


図6 自然人文環境からみた沖縄伝統民家の断面図

であるが、質感と色調に大きな違いがある。玄武岩は多孔質で、輝度が低く、磨耗性が大きい。

6. 自然人文環境が伝統民家に与えた影響

6-1 自然環境の影響

沖縄は亜熱帯性気候で台風が多いため、耐風的、耐暑的建築様式が必然的な要素になっている。このような気候の影響により民家は低い平家ばかりで、2階建ての家はほとんどなく、湿度は高いので床を高く上げている。やはり、2階建ては台風に不利であるといえよう。

冬場の北からの風は「ミーニン」と呼ばれ、集落、屋敷におけるこの方角には、防風の配慮がなされている。また、台風時の風を和らげる為に福木を用いている。この防風樹木は約50%の防風効果があるといわれている。さらに、石垣の塀によりますますその効果は大きい。

図6から石垣の塀の高さはちょうど軒の高さになる。これは台風が来た場合、軒下の壁の部分は強い風の影響は少なく、強い風は軒上の屋根を通して流れてしまう。

家の形態は単純で正方形に近い。構造的には太い柱、低い軒、がっちりとした安定した骨組みになっている。これらのすべてが台風からの被害を防ぐ為である。また、耐暑のため民家は開放的で、屋根は茅葺きや瓦葺きで厚くして断熱効果を得ている。雨端は縁側から約1m外に柱を立て低い軒をさらに伸ばして支え、軒下を広くしているので沖縄の強い直射日光を防ぎ、雨が室内に入り込むことを防ぐ。

濟州島も同様で、石垣の塀、流線型の屋根、深い軒の「ムットウン」の空間、「ムットウン」に設置する「ブンチェ」の開閉装置などは強風から免れる為に作られたものである。また、根は屋根が飛ばさないように茅で作られた網で括る。

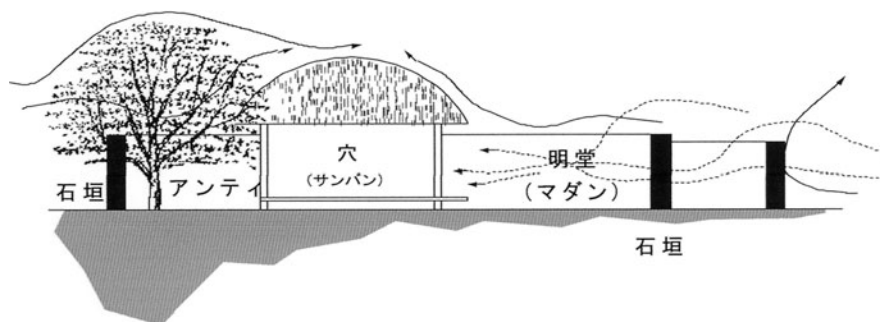


図7 自然人文環境からみた濟州島伝統民家の断面図

濟州島の通風計画で「サンバン」は重要な役割をする。「アンティ」の陰空間は日陰になって周りより低い温度を保ちながら気流の循環現象で、マダンの方向へ移動する（図7参照）。これは「サンバン」の後の扉の細い隙間の流速は速くなって、風がない蒸し暑い夏でも「サンバン」に座っていれば風がふいてきて涼しいと感じられる。つまり、サンバンの「アンティ」側の扉の開閉の状態によって風をコントロールすることができる。このように濟州島の通風計画は環境工学的に有効である。

以上のように両島とも厳しい自然環境から守るために工夫されているのが非常に似ている。たとえば石垣の塀、軒をできるだけ低くすることや屋根を飛ばさないようにするなど強風からの風圧を減少することが挙げられる。

6-2 人文・社会的環境の影響

沖縄の場合、母屋の中心に立派な仏壇を置くのも、座敷の序列を決めるのも、火の神も信仰と深い関わりがある。屋敷の地形は腰掛け状の地形である。これは後高前低の地形、または東高西低の地形をしている。すなわち屋敷から見ると左高右低の地形を好む。

腰掛け状の地形とは村落のレベルの好風水として知られてきた「腰宛」状の地形と同じものである。同時に東高西低の屋敷地形を好むのも、風水上の観念として存在している。沖縄では東を尊ぶ。こういう習慣は、神のうち太陽神（女性神）を捧げることで、東の方向を神の出入りする方位として尊び、逆に西の方向を忌み嫌う習慣と思われる。その理由で一番座を東面させ、その前方（東側）に主庭園をつくり、西に向かって二番座、三番座と部屋の序列を明確にしている。また、母屋を中心に西側に炊事屋、さらにその西に畜舎を配置している。こうした配慮も信仰を基盤とした習慣と思われる。道教思想が琉球の民家に影響を与えたものは家の入

口にある「ヒンブン」、瓦葺き屋根の獅子がある（図6参照）。江戸初期から仏教が民家に影響を強く与えたため仏壇が生活の中に取り込まれ現在に至る。この仏壇は二番座に置く。

濟州島の伝統民家の構成要素として巫俗信仰、儒教思想、家族制度がある。その中で特に民間巫俗信仰は住居形態及び空間構成に数多く影響を与えた。巫俗信仰は濟州島の人々の生活とイデオロギーを最も大きく支配してきた内在的価値の世界ともいえる。宗教的な側面から見ると巫俗信仰は道徳と倫理の体系を持っていなかったが、住居空間で場所意識への影響はあった。

濟州島の伝統住居におけるアプローチは水平軸によって配置されている。これは住居の内部は聖域で絶対的な実際の領域であって、水平通路はその中心に至る険難な道を象徴し、また、俗から聖への向きを意味する。「サンバン」（床房）は「ソングジュ」と言い、家の全体を見守る神が存在し、住居の垂直軸の中心であり、聖の中心でもある。伝統民家の平面的概念は風水の陰陽思想を取り入れ、四方を陰陽に分割している。そのうえに、部屋の場所によって固有の信仰が混在している。「サンバン」は風水の穴であり、住居空間の軸になっている（図7参照）。

風水の基本は厳しい自然環境に対して自然の条件を最大に利用しながら、人々の繁栄を願い安全、快適な生活環境をつくり出すことを目的としたものであり、集落、住居の合理的な空間構成の演出方法であったと思われる。

7. まとめ

以上のように沖縄と濟州島における伝統的集落及び住居の空間構成について比較した。比較した内容をまとめながら両島の類似点と相違点を考察する。また、両島の比較表を作成した（表5参照）。

7-1 一般的考察

濟州島の平均気温は東京に似ている。夏は蒸し暑く、体感温度は実際の気温よりはるかに低く感じ、沖縄の冬とは違うものがある。濟州島は冬の寒さをしのぐために、暖房設備として韓国の本土の影響をうけてオンドルというものがあるが、沖縄にはそのような暖房設備はない。

地形的には、濟州島の周囲には韓国の最高峰の「ハンラ山」や大小の山々がある。それらの山は伝統民家の屋根に影響を与え外形構成となっている。しかし、沖縄には高い山がない。山と伝統民家の屋根の外形構成との調和は感じられない。両島とも川が少ないため、共同施設である井戸は貴重なものである。

両島における共同体意識が強いことは、その自然条件の厳しさに関係性がある。濟州島と沖縄の文化はそれぞれ、本土の文化とは全く違う文化を持っている。もちろん両島の文化も違う

が、南方系文化を感じられる。

沖繩と濟州島の共通点は敷地周辺の石垣があげられる。しかし、石垣の材質には違いがある。濟州島の石垣の材料は玄武岩であり、沖繩ではサンゴ石である。これは、やはり両島の土壌の条件の違いであり、その地域の独特な文化にもなる。

防風対策として、沖繩では、まず敷地を掘り下げることにより、見掛け上の棟高を下げる場合もある。さらに福木による屋敷囲いを用いる。しかし、濟州島ではこのように敷地を掘り下げることが減多にない。また、樹木を植えることはあるが、沖繩のように樹木で敷地の全体を囲み、風を減衰させることもしない。濟州島の樹木の種類はいろいろあるが、沖繩の「福木」のような独特な木はない。その役割は防風もあるが、母屋の後庭に植えて陰の空間、プライバシー空間、涼しい風が吹く空間をつくる。濟州島では強風に対し、樹木より石垣に頼るのが大きいと考えられる。

濟州島では屋根の形態は風の流れを考え、半卵型の流線型の台型になっている。そのうえ、茅葺き屋根が飛ばされぬよう茅縄を網状に掛け、括り付けている。その反面、屋根においては沖繩は濟州島より急勾配で、建物の高さも濟州島より高い。軒の高さにおいてはそんなに差がないが、軒から棟までの高さは沖繩の屋根が高い。門の役割をする沖繩のヒンプンは、機能的に視線を遮断し、防風の効果もあるが、道教的にみると「悪鬼直進を防ぐための闢邪」の関係とあって閉鎖的である。一方、濟州島では「チョンナ」は、機能的に家の人の不在を告げる門であり開放的である。

類似点は沖繩の「シーサー」と濟州島の「ハルバン」である。形は違うが、機能的に魔除けの守護神の役割をする点では共通である。「ハルバン」は個人の物ではなく、村の前にたてられる。「シーサー」は、もとは村の前にたてられていたが、17世紀の後半になってから個人的に屋根に「シーサー」が作られ、現在まで伝来している。

7-2 外部空間構成の比較

門から住居までの進入路は濟州島では曲線的で、沖繩は直線的である。母屋の前に庭があるが、両島とも機能的には類似している。沖繩の庭は「なー」といい、「ヒンプン」から母屋までの距離は短い。一方、濟州島の庭である「マダン」は、「濟州島の文化はマダンから生まれる」と言われるほど、その存在は大きい。これは濟州島だけではなく、韓国本土でも同じであろう。濟州島の民家はマダンを中心にした求心的配置である。マダンの機能は沖繩の「なー」と類似しているものの、食生活と大いに関係があることがあげられる。「マダン」は醤油や韓国固有の赤味噌（コチュジャン）が、一年中保管される場所であり、また冬の約4か月の間に食べるキ

表5 沖縄と濟州島における伝統民家の比較表

環境要因	沖 縄	濟 州 島
気 候	亜熱帯	海洋性
四 季	四季の感じは薄い	四季はやや感じる
年平均気温	23℃（那覇市）25℃（石垣島）	15℃（北濟州）17℃（西帰浦市）
年平均湿度	77.25%	69.15%
平均風速	6.3m / sec	4.25m/sec
風 向	夏：南東 冬：北西	夏：南東 冬：北西
降 水 量	2,136mm	1,558mm
位 置	日本最南端	韓国最南端
地 形	高い山がない（最高峰：525m）	高い山がある（最高峰：1950m）
川	川が少ない	川がほとんどない（乾川）
土 壤	石灰岩（サンゴ石）	玄武岩（火山灰土）
歴 史	本土の属国	本土の属国
風 習	共同体意識が強い	共同体意識が強い
信 仰	土着信仰、御嶽、道教、仏教、儒教、風水	巫俗信仰、道教、仏教、儒教、風水
領域・境界		
堀	サンゴ石、防風	玄武岩、防風
門（入口）	ヒンプン：視線の遮断（閉鎖的）中国からの伝来	チョンナン：コミュニケーションの手段（開放的） 濟州島だけの文化
樹 木	福木：防風、防火、防音、日陰	椿、みかん、柿：防風、日陰、果実、染色
魔 除 け	シーサー（獅子）：本来は村の前に立てられていたが、今は屋根の上に設けられる 家の守護神の役割 ヒンプン、石敢當（鹿児島知覧武家屋敷にも見られる）	ハルバン：村の前に立てられる帽子をかぶった耳が大きいおじいさんの形はモアイ像に似ている 村の守護神と里程標の役割
外部空間		
進 入 路	進入路から母屋まで直線配置	進入路から母屋まで曲線配置
緩衝空間	公と私との緩衝：ヒンプン	オルレ、チョンナン
庭	作業、儀式場、閉鎖的（ナー）	作業、儀式、開放的 マダン（陽の空間）
後 庭	あたい（畑）	アンティ（陰の空間）
便所・豚舎	フール・トウシ（豚便所）	トンシ（豚便所）
菜 園	あたい、母屋の左側、裏側	ウヨン、敷地の内外側
台 所	トウラ（別棟）、西に位置	ジョンジ（母屋にある）、母屋の左側あるいは右側に配置

	沖 縄	済 州 島
倉 庫	高倉：高床式 構造：木造丸柱、4本、6本、9本、南方系	ホッカシ：構造は柱なし、石壁構造 北方系、外の倉庫 コバン：室内の倉庫（主に穀物）
内 部 空 間		
特 徴	前室と後室に分ける、横分割を基準とし、縦分割を取っている	サンバンを中心に側面に2つの部屋を持っている
間 取 り	<ul style="list-style-type: none"> • 一番座：東に面している、床の間が設けられている、最良の位置、客間 • 二番座：仏壇が設けられる、親類・男子を応接する客間、主人夫婦寝室を兼ねる • 三番座：中流以上の住居若者・女性の客間、茶の間、食事部屋 • 裏 座：寝室、産室、納戸などの重要な部屋 	<ul style="list-style-type: none"> • サンバン（マル）： 床房・居間、主屋の中央部に位置、家族の集会、休憩、接客、食事、夏季の就寝、家の平安と富を担当する家の代表神をまつる • 大クドウル（アンバン）： 夫婦の寝室、幼児の寝室、産室、食事室 • 小クドウル：子供部屋 • ジョンジ：厨房、炊事、作業、乾燥、貯蔵 • チェツパン：家事労働空間と安息の緩衝空間寝食分離ができる現代生活の基本の間取り • コバン：収納空間
緩 衝 空 間	雨端：室内と庭を結ぶ、緩衝空間、雨が室内に吹き込まないようにする、日差しを防ぐ	ムットウン：室内と庭を結ぶ緩衝空間、日差しを防ぎ、雨が室内に吹き込まないようにする。
立 面		
屋 根	茅葺き・赤瓦 勾配：5寸、5寸5分、6寸 屋根の固定荷重を利用し、重くして強風に飛ばされないようにする	茅葺 勾配：3寸、流線型の台形、棟の線がはっきり見えない半卵型の低いドーム、強風に対する抵抗を最小限
壁	木造 開放的	混構造：木造+石造 閉鎖的
材 料	石材：サンゴ石 木材：榎（チャーギ）	石材：玄武岩 木材：白樺、栗の木、桜
気候の影響	高床、石垣、別棟 雨端の空間、平面形態は単純：正方形、低い棟 高温多湿に対する開放的な間取り、縁側 強風対策として瓦屋根は漆喰で固定する、低い軒	石垣、別棟 非耐力壁の石積み、流線型の屋根 ムットウンの空間 茅葺き屋根に網で括る 瓦葺き屋根は石灰で接着 平面形態は単純：一字形の低い棟
地理の影響	風水思想：背山臨水、母屋の向き、集落の軸、季節風の関係 東優位、西劣位	風水思想：背山臨水、四神相応、母屋の向き、集落の軸、季節風の関係 南優位
社会的影響	土着的な民族信仰、民族信仰は座敷の序列を決める 東を尊ぶ：神の出入り • 道教思想：ヒンプン、獅子 • 仏教：二番座の仏壇	風水思想：北劣位 巫俗信仰、儒教思想、巫俗信仰は住居空間の場所、意識を与える、母屋の真ん中であるサンバンを尊ぶ：家の全体を見守る神、ハルバン

ムチの貯蔵食品「キムチャンキムチ」が保管される所でもある。菜園においては、両島とも敷地の中にあるが、済州島は敷地外も存在する。共同体的意味はない自家耕作用であることは共通である。また、両島ともに独特で、大きな共通点として豚舎と便所と一緒であることがあげられる。沖縄では、それを「フル」、その穴を「トウシ」といい、済州島では二つ合わせて「トンシ」ということから、言葉でも似ていることがわかる。

沖縄の特徴である「トウラ」の二棟作りはほとんど母屋の西に位置し、用途的には厨房と決まっている。済州島の場合、二棟作りはあるが、用途的には違い、二棟より副屋の方が近い。沖縄の高倉は別棟になって高床式であるが、済州島では倉庫として別棟は造られず、副屋の中に配置されることはかなりの違いである。

7-3 内部空間構成の比較

沖縄伝統民家の特徴である雨端の機能と類似しているのは、済州島では「ムットウン」である。雨端は、沖縄が低緯度であるため、日差しより雨と風を防ぐ目的が優先している。一方、「ムットウン」は、中緯度の済州島では雨と風より日差しを防ぐ目的が優先されているためだと思われる。両島のこの空間は、室内と室外をスムーズにつなげる緩衝空間でとして重要な役割をしていることが非常に似ている。

間取りは、沖縄においては、無土間で前室と後室に横分割とし、前室を間仕切りして分けられる。一番座をかみならず東の方向に置いて西の方向に二番座、三番座に置くのは、自然環境の影響ではなく、沖縄の慣習である。済州島の場合、本土と似ているというよりはむしろ、日本の民家の間取りとの共通性がある。日本の民家の広間型と呼ばれる間取りとよく似ており、部屋が前後に重なっている。済州島は「サンバン」を中心に部屋と台所が左右の方位に関係なく配置されるが、沖縄の場合は、済州島とは違い、東の方位を尊び、反対側の方位である西の方位を忌み嫌う習慣がある。

以上のように沖縄と済州島における集落と住居空間について比較しながら類似点と相違点を洗い出した。その結果、両地域における住まいの特徴が明らかになった。

参考文献

- 住宅建築別冊・40『南島・沖縄の建築文化 その1 地域的個性と現代の課題』建築資料研究社、1991
- 住宅建築別冊・40『南島・沖縄の建築文化 その2 今日住居30題と伝統民家論』建築資料研究社、1991
- 野村孝文『南西諸島の民家』相模書房、1961
- 田辺泰『琉球建築』座右宝刊行会、1972
- 太田静六『九州のかたち民家』西日本新聞社、1977

普請研究『沖縄・竹富島の家造り』普請帳研究会、1987

日本の美術『第290号民家と町並み九州・沖縄』至文堂、1990

朴賛弼、山田水城、古川修文「韓国済州島における城邑集落の構成について風水思想からみた集住空間に関する研究 その1」、『日本建築学会計画系論文集 No. 497』、pp. 89～94、1997年7月

朴賛弼、山田水城、古川修文「風水思想から見た知覧町武家屋敷の空間構成の考察」、『民俗建築第112号』日本民俗建築学会、pp. 45～52、1997年11月

朴賛弼、山田水城、古川修文「伊是名島・渡名喜島の集落における地形及び軸の空間構成と風について風水思想から見た沖縄集落の空間構成に関する研究 その1」、『民俗建築第115号』日本民俗建築学会、pp. 89～96、1999年5月

朴賛弼、山田水城、古川修文「久米島・石垣島の集落における地形及び軸の空間構成と風について風水思想から見た沖縄集落の空間構成に関する研究 その2」、『民俗建築第116号』日本民俗建築学会、pp. 95～99、1999年11月

朴賛弼、山田水城、古川修文「西表島・竹富島・与那国島の集落における地形及び軸の空間構成と風について風水思想から見た沖縄集落の空間構成に関する研究 その3」、『民俗建築第117号』日本民俗建築学会、pp. 129～134、2000年5月